研 究

山間住居に於ける1,2の氣候景觀

—岩手県和賀川上流の例—

四 津 隆 一

1 はしがき 地域の研究に於て氣候要素は非常に重大な意味を持ち、そのため多くの先学は気温降水量日照量等の実測値を基礎として研究を推し進められた。しかし、これは余程発達した観測点網のある所でなければ充分な効果は得られなく、そこで植物や住居景觀等より間接的に1地域の氣候を研究してゆく方法を、矢沢氏や三沢氏等が多く発表されている。この方法を通じて大凡正確と思われる問題が提出され、更に実測値が得られて合せ説明されれば一層完全になると思われる。さて筆者の調査した場所は北上川の支流で黒沢尻（北上市）で合流する和賀川の上流である。この和賀川は岩手県、秋田県の境の和賀嶽より源を発して南北の方向に縦谷として流れ、川尻より東へ流路を変更して横谷として流れている。上流部には山間としては珍らしい程広大な貝沢野を始め広い三段又は五段の河岸段丘より成る平地が発達し、水田地となつている。ここに所謂沢内三千石の農業及び更に山間であるため製炭も行われている農山村地帯がある。次に中流地帯は湯本、湯川等の温泉及び銅鉄等の鉱山、即ち土畑、鶯合森、仙人等の地域であり、平地も狭く、農業の発達は見られず、下流の尻平川、夏油川の両扇状地及び和賀川の沖積地になつて再び水田を主体に扇央を畑とする農業地域となつている。この和賀川流域の上流地域の人文景觀特に住居の景觀を観て積雪や複雑な地方風との関係を究明してみようとする。

2 家屋景觀の特色 筆者の特に注意した住居の特色は次の5つの事項にまとめられる。

(1) 玄関 雪国の玄関は夫々特色あるが、本地方では下流の藤根村、江釣子村等の農家の玄関は黒沢尻周辺のそれと同じ形の母屋の屋根の下に附いている。そして冬季風よけとして萱などを編んだものを風上、つまり西側に仮に設置する。所が1般農家でも横川目村あたりから固定したもの

となり、切妻玄関とも称すべき主屋の屋根の下にある玄関先が外に突き出てゐる。(Fig 1)

この切妻玄関の長さは横川目、及び岩崎村東部では1m又は1.5mであり、岩崎村西部の山口、岩沢では2m位と西にいくにつれて伸びてゆき、湯田村東部の大荒沢、杉名畑部落では2.5m~3mとなり、更にの大石川尻では3m乃至4mのものさえ見られる。これが和賀川上流部の太田部落迄続き、其れより上流ではこの玄関の長さは漸減の傾向を辿り、大木原や貝沢部落附近では2~3mになつている。

(2) 雨戸の上の明り窓（高窓）。1般農家の雨戸の明り窓の有無及び大きさ等についてみるに、黒沢尻、藤根、横川目村附近迄は雨戸の上に殆ど見られず、又あるとしても20~30cm位の幅しかない。それが上流地方へゆくにつれてこの欄間は農家で必ずつき、特に大荒沢より例外なくついている。更に大石よりはこの窓が2段に、つまり硝子が縦に2枚づつ付けられる様になる。これは北アルプスの積雪地方に見られるものと同じ形である。

(3) 二階建 和賀川下流では農家で二階建の家等全く見られないが、上流部へゆくとも母屋の1部に二階が設けられ、客間には少し知識人の居る所ならば書齋に使われたりする程の畳を敷いた部屋がある。構造に於ても、利用面に於ても養蠶地の二階建と大いに異つている。そして此の二階建は新町、川尻、太田等の部落で卓越的分布を見せている。大体二階のある所は太田、川尻等で平入が多く、かゝる平入では中央にあるが、新町の如き妻入では玄関のすぐ上にある。何れの場合も屋根の底は相當に長く窓は南側1方となつてゐる。この二階建農家も最上流部の貝沢、大木部落では著しく減少し、大木原部落で一軒しか見られなかつた。

(4) 住居の向き及び切落しの向き。此の上流部

では住居の向きで二つのタイプに分けられる。此の地方は谷に沿うて集落が発達し家屋は南向きか東向きか何れかになる。換言すれば略南北に流れる上流の和賀川に沿うて、家々が流路に直角に建てられるか、又は流路に平行に建てられているかと云う事である。前者に属するのは大木原、貝沢、大志田、大荒沢、若畑、八又、高下、中村、丸志田、和賀、泉沢、七内、猿橋、太田の北部。後者に属するものは桐沢、長瀬野、蛭山、鍵沢、飯豊、太田の南部、下幅、坂下、片倉、下ノ沢、前郷、新町、田代、内沢、大野、分沢、清水ヶ野、下樺沢、上樺沢、寅沢、下前、槻沢、湯田、下左草、左草、湯之沢の部落である。つまり太田部落の北部より川と平行に即ち東向き又は南東向きに家屋が配列して居り、太田部落の南部より南の方及び和賀川の横川以外の支流に沿うた所は南向きに家屋が並んでいる。つまり和賀川本流に対して直角に配列している。勿論例外もあつて前郷部落の南向きの家に混つている2軒も其の例である。母屋の建築様式は大部分寄棟であり、必ず一方が切落されている。つまり向つて右又は左となつている。これも家の向きと同じ地域差が見られ、太田部落の北部では川と平行に建てられている。つまり家々は北側、上流の方に切落しが見られる。太田部落の南部より下流は東側に切落しが見られる。(Fig 2)

(5) 防風林 此の地方では余り顕著な防風林、屋敷森は見られず、スギ、クリ、クルミ等が比較的多く西側乃至南側に植えられている程度である。

3 気候と家屋景観 以上気候景観として述べて来たものと深い関係をもつと思われる気候要素は積雪と風である。此の地方も他地方同様気象測点が少く、そこで実際の気候状態を地方民に聞いた。個人差はあるが大体まとめてみると、和賀川の上流にゆくにつれて積雪量は増大してゆき、陸中川尻で190㎝、湯田では更に240㎝になる。これが太田部落まで続き、太田部落より上流部へゆくと積雪量は減少し、上流部の貝沢部落では4尺位となり、山伏峠を越えて雫石町にゆくと2尺程になる。

風についてみると大体南風が中心で、冬になると西風又は南風が卓越し、強風の時は北部では北風が中心で新町や貝沢野は強風特に著しい。

以上述べて来た住居景観は気候要素で説明され

る点もある。黒沢尻では丈夫な家なら殆ど雪を屋根から下す程でない。それが横川目通りになると平均1回乃至2回の屋根の雪下しが見られ、和賀仙人及び大荒沢で2回乃至3回、川尻で4回、太田新町では五回も下さねばならぬ。下された屋根の雪は当然家の周囲に重なつて1丈以上となり、高窓の必要も考えられ、特に積雪量の大大石、川尻、新町、太田等の部落で2階建の住居が見られるのも此の爲である。そしてこの2階建が北方、即ち最上流の大木原、貝沢部落で減少してゆくのも積雪量と深い関係がある。又妻入玄関の長さが積雪の大地域で長い事は同様な関係を示して居る。尙妻入の新町の様な所の2階建住居は比較的に新しいものであろうと小倉教授は感想を漏らして居られた。次に家の向きと関係をもつ切落し又は半切妻は風下にあるのが特色で此の理由は屋根裏を乾草の貯蔵にする爲とも云われ、又冬季雪降り、その際同じ屋根でも風下の傾斜面に吹き溜りが出来、従つて降される雪と屋根下に積る雪で風下が雪に埋れる。そこで屋根を高く半切妻にして置く云う。切落しを明り窓の必要からだけ説明する事は出来ない。これは切落した側が大低既になつて居り、其の既の上は乾草置き場か又は下男の部屋に使用されているので家全体からの重要度は低いと見られるからである。尙これに関連して家の向きは前述の如く太田部落でも北と南で異つてくる。しかし、同じ太田以北でも和賀川東岸では蛭山や鍵沢部落は河筋に向つて配列しているが、この地方では何れも冬季西風が卓越してくるのである。風の強さからみれば西岸よりは強い様に見られている。地方民は降る雪も吹き飛ばされて少しづつ積らず、それで春に早く雪が解けるとも云つて居る。尙例外——(Resume p.33)として前郷部落で大部分が道路に直角に配列しているのに道路の西側の2軒のみは東南向の道路に平行に並んで居るが、太田部落の北半と同様山地が家の背後迄近く追つて居り余裕のない点と冬の西風の余り強くない点より説明される。

以上和賀川流域主として上流の気候景観としての住居に就いて観察し紹介したのであるが、土地利用の面よりの気候景観もあり、特に米作地の分布拡大及び単位面積当りの生産量等興味ある問題で次の機会に発表したい。

Communication between the Mogami Basin and the Rikuzen Plain in the Edo Era

Ichiro Tanabe

Between the Mogami basin (Yamagata Prefecture) and Miyagi Prefecture there are two lines of communication which lie through the Ou range. One is the line between the valley of the Eai River and that of the Oguni River, while the other is between the valley of the Naruse and that of the Nybu.

The former once had two traffic routes; the route between Onikobe and the Oguni basin, and the route between Tashiro and the Oguni basin. Both of these routes, however, being side roads, was out of use. From the Middle of the Edo era, the route starting from Narugo and ending, Via Sakaida, at the Oguni basin, began to be in use. In 1917 the Rikuu Railway Line was established along this route. It seems that it is, however, far more important to make full use of this route as truck traffic, linking Akita, Sakata and Tsuruoka on the coast of the Japan Sea with the Ishinomaki Districts on the coast of the Pacific Ocean.

The latter was in use to the fullest in the 8th century as the route linking the coast of the Japan Sea with that of the Pacific Ocean, but in the 17th century the Navezawa Silver mine was doing a thriving business and consequently the Karuizawa pass was used. And after that this route was utilized when people carried goods from Kyoto and Osaka to the Rikuzen Plain or Sendai via Sakata and Oishida. The safflowers used for Women's toilet purposes were also carried to Edo by this route. In 1893 the Nabekoshi pass (514m) was opened. This route, became desolate owing to the opening of the Rikuu line in 1917. Nowadays a truck route linking Sakata and Tsuruoka with Sendai goes over the Sekiyama pass (54m), but the mending of the Nabekoshi route is considered to be very important because of its lower sea-level.

A few Climatic Landscapes of the Houses in the District of upper Waga River

Ryuichi Yotsu

The Waga River is a branch of the Kitami River, and the upper stream flows from north to south with the longitudinal valley in the Ou mountains. The district is the most famous drifted-snow district, and the regional wind directions are very complicated and are influenced by the topography. The writer investigated house types there.

(1) In the downer stream district the entrance of main house appears similer to that in the Kitakami lowland. Some houses, however, have set up temporary extended entrances with wood and miscanthus. In the upper part this extended entrance becomes a fixed one. These entrances which project from the main houses are 2m in length in the Iwasawa community. This becomes longer as one goes further westward, and reaches to 2.5m-3m in Oarasawa, 3m-4m in inner districts. (2) The window as a transom becomes larger in size in inner Oarasawa. This is similar to that in the North-Japanese Alps and other drifted snow districts. (3) We can not find farmhouses with upstairs in the lower Waga stream, but in the upper stream we can find some farmhouses with them in a part of the main house. These differ from those of the silk-raising district. (4) The frontal direction of houses in the lower river districts face the south and are cut down on the east side. In the upper river area, houses face toward the east or southeast side and are cut down on the north or northeast. (5) The writer asked local inhabitants for climatic data—drifted snow and wind directions. The interpretation of a few climatic landscapes are as follow. (7) The inhabitants must remove the snow from their roofs several times a year, so that every house is surrounded by snow laid 3m deep. Therefore, without exception we can find a special entrance, two-story houses and large transom windows for deep snowfall. Moreover, the cutting down of a house will face toward opposite side of the wind direction, because snow drift on the opposite side of wind direction.